

古英語における語順管見

—その文法的示差性をめぐって—

成 田 圭 市

1. はじめに

語順は現代英語において文法関係の決定という非常に重要な役割を果たしており、話題化や倒置などの特定の構文を別にすると、規範となる固定した語順からの逸脱は非文法的な文となる。現代英語では、文中の個々の構成素の文法的な機能を示す屈折語尾がほぼ消滅してしまっているため、こうした語順への依存は当然のことである。かろうじて、現代英語においても、人称代名詞は、主格・所有格・目的格という格による語形変化を残してはいる。しかし、格により文法関係が示されているにもかかわらず、以下のような文は文法的とは認められない。たとえ文中の各構成素の文法関係が格によって明示されていても、規範的語順からの逸脱という重大な違反を犯しているからである。

- (1) a. *Him despised I.
- b. *Despised I him.
- c. *I him despised.
- d. *Despised him I.

一方、古英語 (OE) 期においては、現代英語と比べて比較的に文の語順が自由であった。現代英語と異なり、屈折語としての性格を色濃く残していた古英語では、文中の要素の文法機能は、先ず屈折語尾により示されたからである。従って、以下の文は、いずれも OE においては可能な文である。

- (2) a. Se cyning sloh þone beran. (S-V-O) (“The king killed the bear.”)
 b. Se cyning þone beran sloh. (S-O-V)
 c. Sloh se cyning þone beran. (V-S-O)
 d. Sloh þone beran se cyning. (V-O-S)
 e. Þone beran se cyning sloh. (O-S-V)
 f. Þone beran sloh se cyning. (O-V-S)
- (3) a. Se bera sloh þone cyning. (S-V-O) (“The bear killed the king.”)
 b. Se bera þone cyning sloh. (S-O-V)
 c. Sloh se bera þone cyning. (V-S-O)
 d. Sloh þone cyning se bera. (V-O-S)
 e. Þone cyning se bera sloh. (O-S-V)
 f. Þone cyning sloh se bera. (O-V-S)

ただし、文法関係が屈折により示されていたとはいえ、完全に自由な語順であったというわけではなく、そこには、ある程度の一般的な傾向あるいは標準型のようなものが認められるのもまた事実である。主語 (S)・動詞 (V)・目的語 (O) という最も基本的な文要素だけに限っても、可能性としては (2)(3) に挙げた 6 通りの語順があり得るが、OE のテキストに実際に観察されるものとしては、S-V-O, S-O-V, V-S-O が相対的に他を圧している。この三つの基本的語順は多くの OE 文法書の認めるところであり (Andrew 1940, Quirk & Wrenn 1955, Traugott 1972, Mitchell & Robinson 1982, Baker 2003)、例えば Traugott (1972) は OE の語順を以下のように一般化している。

Type 1 S (Aux) V (O) ...: 主節；等位構造の最初の節

Type 2 (X) Verb/Aux S ...: 疑問文・否定文；時・場所の副詞表現が文頭

Type 3 S (O) ... V (Aux): 従属節；等位構造の 2 番目以降の節

ここで、屈折が文法関係を示していたにもかかわらず、何故一定の基本的語順が頻繁に見られるのか、また逆に、基本的語順からの逸脱は何を反映しているのか、という根本的な疑問が当然生じる。これは本稿の議論を超える大きな問題であるが、大まかな見通しとしては、文の情報構造にその解決の糸口が求められよう。theme / rheme, topic / comment, old / new information, foreground / background などの情報構造にかかわる概念は、ごく大雑把に捉えれば、先ず最初に思いついたことから口に出していくという、いわば思考の流れを反映した語順の背後にある原理である。文法関係が屈折語尾により明示される言語においては、語順は文法関係の表示という役割を免除されているため、語順が情報構造を反映する程度はかなり高くなると考えられる。それ故、OEの(比較的)自由な語順の考察にはこの観点が必須である。一方、文法関係を表す手立てとして専ら語順にのみ頼るようになった現代英語は、固定した語順に情報構造を反映させるために、受身文・tough構文・話題化・倒置構文・外置などを初めとして、さまざまな派生構文を発達させてきたわけである¹⁾。

2. OEにおける語順の機能

OEから現代英語に至る歴史の中で、英語は、屈折語尾の水平化とともに、次第に語順が固定化され、文の各要素の文法関係を示すのに語順にのみ依存するような言語に推移してきたとされる。これを Fries (1940: 199) は、"The development of English has been away from the use of taxemes of selection with non-distinctive and connotative word-order, toward the use of taxemes of order operating practically without the aid of other devices." とまとめている。さらに Fries は、この引用の直後で、OEにおいて語順は文の文法関係に何ら関わりを持たない ("In Old English, however, the order of the words ... has no bearing whatever upon the grammatical relationships involved.") と断定している。これをそのまま受け入れるならば、OEにおける語順は全て文体的 (stylistic) なものに過ぎなくなり、

そこに見られる多様性は単に随意的な交替現象ということになろう。

しかし、一方では、第1節でも述べたように、OEの語順にある種のパターンが顕著な傾向として観察され、それが一定の文法的機能と結びついているように思われるのもまた事実である。Mitchell (1985: § 10, § 3894) は、「SVOという語順が、OEにおいても既にある程度は文法的仕組みとして確立していた」と述べており、また、Mitchell & Robinson (1982: 59) は、「アングロサクソン人は既に、主語が最初に来るという感覚を有していたようだ」と述べている。ならば、OEの語順は完全に非示差的 (non-distinctive) であるという Fries の発言は、今一度批判的に吟味する必要があるだろう。OE期にあっても、語順が何らかの意味で示差的 (distinctive) であったのではないか、つまり文法的な役割を担っていたのではないか、という問題の検討が求められるわけである。

ところで、語順の持つ示差性には二通りあることに注意したい。現代英語を例にとって説明すると、NP-Aux-V-NP という構造 (John will buy the book.) は、Aux-NP-V-NP という構造 (Will John buy the book?) との対比において、この構造を有する文が平叙文であることを示し、また、この構造の中で、左端のNPが文の主語として機能し右端のNPが文の目的語として機能するという、文中の要素の文法関係をも示す。つまり、語順の示差性には、以下の二つの種類が考えられるのである。

- (A) ある語順を有する文のタイプを、他の語順との対比において示す機能
- (B) 文内の各要素の文法的関係を示す機能

以下本論では、この二つの種類の語順の示差性を、OEのテキストの実例を参照しながら検証していくことにしたい。

3. 文の種類を示す語順

このタイプの語順の示差性は、上で見た三つの基本的語順からも明らかなように、OEにおいても重要な働きをしていたと思われる。これがもっとも顕著なのは、従属節に典型的に見られる S ... V という語順であり (Quirk & Wrenn 1955, Traugott 1972, Mitchell & Robinson 1982, Baker 2003)、Traugott (1972) はこれを "subordinate order" と呼んでいる²⁾。つまり、V が文末に来る語順は、その文が従属節であることを示す役割を果たすわけである。現代英語と異なり、副詞と接続詞が同形である OE においては、これは当然のことと言えよう。この語順の役割は、OE にしばしば現れる相関構造 (correlative construction) の中では、ほぼ必須のものである。

- (1) Þá iċ þis eall 3e-munde, þa 3e-munde iċ hú iċ 3e-seah, ... ("When I recalled all this, then I remembered how I saw ...") (Diamond 1970: 106)

もしここで語順に違いがなく þá に続く節がどちらも同じ語順だったとすると、この2つの節の関係を把握することはかなり難しくなるだろう。次例のようにさらに複雑な構造を有する文では、なお一層、この示差性が重要な役割を果たしているのが理解されよう。

- (2) Þá 3e-munde iċ hú séo á was árest on Ebreise 3e-þéode funden, and eft, þá hie Crécas 3e-leornodon, þá wendon hie hie on hira ágen 3e-þéode ealle, and éac ealle óðre béç. ("Then I recalled how the law was first found in the Hebrew language, when the Greeks learned it, then they translated it all into their own language, and also all other books.") (Diamond 1970: 106)

ただし注意すべきは、こうした従属節を示すという語順の役割は、OE において絶対的なものであったわけではなく、あくまで一般的な傾向であったとい

うことである。相関構造においては、かなりの程度でこの示差性が利用されてはいるものの、他の場合には、主文であってもVが文末に置かれたり、逆に、従文内でVが文末に来ない例も実際に散見するからである。これについては、本稿では立ち入る余裕はないが、情報構造などの他の要因を探ってみる必要があるのは言うまでもない。

次に、疑問文では、現代英語と同様に、主語と(助)動詞が倒置された語順となる。つまり、この語順が疑問文を示す文法的な標識となっているわけである。

(3) *Wilt þu we gað and gatriað hie?* (“Do you wish us to go and gather them?”)

(4) *Gehyrst þu, sælida?* (“Do you hear, sailor?”) (Mitchell & Robinson 1982)

(5) *Þā cwæð Drihten tō Caine: “Hwær is Abel ðīn brōðor?”* (Then the Lord said to Cain: “Where is Abel, your brother?”) (Baker 2003)

ただし、動詞と主語の倒置が起これば全て疑問文と解されるわけではないのも現代英語と同じである。文頭に否定辞や時・場所の副詞が置かれた場合には倒置がほぼ義務的であるが、それ以外にも、次例のように、何らかの文体的な要因により倒置が生じる。こうした倒置に関しても、情報構造等の観点からの説明が求められよう。

(6) *Wæron hī ēac swýpe druncene, for ðām þær wæs brōht wīn sūðan.* (“They were also very drunk, for wine had been brought from the south.”) (Baker 2003)

4. 文要素の文法関係を示す語順

OEにおいて語順が文中に生起する各要素の文法関係を、屈折語尾に頼ることなく示しえたか、という問題は、各語順の生起頻度の統計を検討しても決して解決されない。たとえS-V-Oという語順が平叙文における一般的な傾向であると判明したとしても、OEにおいて各要素間の文法関係は既に屈折語尾により明示されているのだから、語順が文法的示差性を有しているということにはならないのである。

それならば、OEでは、文中での要素間の文法関係は全て屈折変化によってのみ示され、OEの語順は一切示差性を有していなかったのだろうか。

これを探る一つのアプローチとして、屈折語尾のみでは文法関係を示すのに十分でない事例を検討してみることが考えられる。つまり、OEでは屈折語尾により文法関係が示されていたとはいえ、いくつかの格、とりわけ主格と対格が同形となる名詞・代名詞・冠詞・形容詞が多いのも事実であり、それがために屈折だけでは文の文法関係が一義的には決められずに文構造が曖昧になってしまう文が生じてしまうのである。そのような例においては、屈折語尾が唯一的に文法関係を示す役割を果たせないのだから、当然他の何らかの方法によって文法関係が示されねばならない。さもないと、文構造が曖昧なままになってしまうからである。こうした潜在的に曖昧な構造を有する文が実際の文脈の中で一義的に解釈される際に、語順がその曖昧さの解消に貢献するような事例があれば、それはOEの語順が文法関係を示す役割を担っていたと結論付ける根拠の一つとなろう。

試みに、主文と従文を併せて総計400文あまりのOEの散文テキストを分析してみたところ、そのうちの22文が潜在的に曖昧な文構造を有する文であった。ただし、そのうちの10例ほどは、本節の後半で論じるように、語順以外の要因が曖昧さの解消に関与していると思われる例であり、OEの語順の示差性を裏付けるものではない。なお、以下に引用する各例文の後には、実際に解釈される語順と、潜在的に可能な語順の二つを示した³⁾。

4.1. 潜在的に曖昧な構造

以下の例は、いずれも、潜在的に曖昧な構造を有するが、実際に与えられる解釈においては、OEにおいて基本的とされている語順、つまり主語が先行する構造が選ばれるケースである。これは、主語と目的語の屈折語尾が唯一的に文法関係を示すことができず曖昧さが生じてしまう場合、OEでの基本的な語順に頼ることで文法関係を示したと解することができる。つまり、語順が示差的に用いられている事例と考えることができる。

- (1) Hie habbaþ swiðe lýtle scipu ... (S-V-O vs. O-V-S) (“They have very small boats”)
- (2) and berað þá Cwénas hira scipu ofer land on þá meras (V-S-O vs. V-O-S)
 (“and the Finns carry their boats overland to the lakes”)
- (3) ...: lét him eallne weþ þæt wéste land on þæt stéor-bord ((S)-V-dat-acc(adv)-
 O vs. V-dat-O-S) (“the whole way (he) kept the uninhabited land on his
 starboard”)
- (4) and þæt wáron eall Finnas. (S-V-C vs. C-V-S) (“and they were all Lapps”)
- (5) And þonne be-nimþ Wisle Ilfing hire naman ... (V-S-O vs. V-O-S) (“and
 the Vistula deprives the Elbing of its name”)
- (6) Þára wáron siex stæl-hránas; ... (V-S-C vs. V-C-S) (“Of these, six were decoy-
 reindeer”)
- (7) Hér Cyne-wulf be-nam Siþe-beorht his riðes ... (S-V-O vs. O-V-S) (“Here
 Cynewulf deprived Sigeberht of his kingdom”)
- (8) Ælf-ræd cyning háteþ grétan Wær-ferhþ biscop his wordum ... (S-V-O vs.
 O-V-S) (“King Alfred bids Bishop Wærferth be greeted with his words”)
- (9) for-þám hie fôþ þá wildan hránas mid. (S-V-O vs. O-V-S) (“because they
 catch the wild reindeer with them”)
- (10) and hie náfre his banan folgian noldon. (S-O-V vs. O-S-V) (“and they
 would never follow his slayer”)

これらの例について、たとえ構造的に曖昧な文であっても、最終的には文脈が一義的な解釈を導くものだから、結局語順そのものは文法関係の決定に無関係であるとの反論が出るかもしれない。例えば Mitchell & Robinson (1982: 63) は、主格と対格の区別が失われた “*þas seofon hi gecuron ...*” という文において、*þas seofon* と *hi* のどちらが主語となるかを決めるのは文脈だけであると述べている。確かに、曖昧さの解消は最終的には文脈との意味の整合性の上に成り立つものである。ただ、ここで重要なのは、そうした文脈と整合した解釈を表す構造が、まさに OE の基本的語順と一致しているという点である。上に挙げた (1)-(10) のいずれの例においても、文脈内で実際に与えられる解釈は、主語が目的語・補語に先行する構造に即しているものであることに注目したい。

一方、以下の例では、目的語が主語に先行しており、OE の基本的な語順ではない方の構造が選ばれている。相対的に少数とはいえ、こうした語順の文の存在は、上に挙げた諸例とは異なり、OE における語順の文法的示差性を積極的に示す根拠とはならないように思われる。

(11) *Þá déor híc hátaþ hránas.* (O-S-V-C vs. S-O-V-C) (“They call these animals reindeer.”)

(12) *þá híc Crécas 3e-leornodon, ...* (O-S-V vs. S-O-V) (“when the Greeks learned it”)

ただ、この2例について着目すべきは、どちらも目的語が話題として前置されているという事実である。(11) に先行する文脈において *Þá déor* は明らかな話題となっており、また、(12) の *híc* は、先行文脈内の話題に言及する代名詞である。OE における話題化の規則の詳細は不明であるが、少なくとも、先行文脈で既に語られて話題となっている要素が文頭に前置されて、文の出発点として機能するというのはごく自然なことであろう。この2例以外にも話題化が OE

の基本的な語順を覆している例がデータ中に散見するが、いずれも、話題化された要素(斜字体)は先行文脈で話題となっている名詞句か代名詞であり、さらに注目すべきは、全て O-S-V という語順になっている点である。

- (13) ... for-þæm hie habbaþ swiðe æðele bân on hira tóðum. *Þá téþ* hie bróhton sume þæm cyninge. (“... because they have very fine ivory in their teeth. They brought some of these teeth to the king.”)
- (14) And *þæt lýtle þæt hé erede*, hé erede mid horsan. (“And the little that he plowed, he plowed with horses”)
- (15) And *híne* þá Cyne-wulf on Andred a-dráfdæ, ... (“And then Cynewulf drove him away into the Weald”)
- (16) ... oþ-þæt *hine* án swán of-stang æt Pryfetes-flóðan. (“until a certain peasant stabbed him to death by the stream near Privett”)
- (17) ...ær *hine* þá menn on-fundon ... (“before the men discovered him”)

Traugott (1972: 109) は、この O-S-V という語順を典型的な強調的語順であると述べているが、ここに見られる目的語の前置は、強調というよりもむしろ、OE における話題化構文の語順と考えるべきであろう。いずれにせよ、上の (11) と (12) の例は、話題化という観点から解釈されるべきものであり、ここで問題にしている OE の語順の示差性との関連で言えば、話題化された要素の後に S-V の語順が続いている点が重要である。

4.2. 語順以外の要因による構造的曖昧さの解消

主格と対格が同形のために屈折語尾が一義的に文法関係を示し得ない場合でも、以下のような事例では、動詞の意味が選択制限により主語と目的語とを決定していると考えられることもできる。もしそうなら、これは、語順以外の要因が文の文法構造を規定している事例となる。

- (18) And swiðost ealle his spéda hie for-spendaþ ... (O-S-V) (“And mostly they squander all his riches”)
- (19) Þá Beormas hæfdon swiðe wel 3c-búd hira land, ... (S-V-O) (“The Permians had cultivated their land very well.”)
- (20) Þá tēþ hie bróhton sume þám cyninge. (DO-S-V-IO) (“They brought some of these teeth to the king.”)
- (21) Fela spella him sæ3don þá Beormas ... (DO-IO-V-S) (“The Permians told him many stories”)

ただし、この議論は、OEの動詞が現代英語の動詞と完全に等価であることを前提としており、確定的な結論を得るためにはOE動詞の意味論的な分析を俟たなければならない。例えば上の(18)を例にとれば、これをS-O-Vの構造と解釈すると“All his riches squander them.”となり、現代英語の観点からすると意味的に奇妙な文となってしまう。しかし、OEのfor-spendanと現代英語のspendとが完全に同じ意味を持ち同じ使い方をされるかどうかは、アプリアリには決められないことであり、これはbúan (“cultivate”), bringan (“bring”), secgan (“say”)に関しても同様である。これらの動詞がOEにおいてどのような選択制限を有していたのかという問題は、その比喩的用法も含めてOEの語彙の意味に関する綿密な考察に委ねられねばならないだろう。従って、上の(18)-(21)のような例において、動詞の意味的情報が文構造の曖昧さを解消する要因となりえたと断言することはできないように思われる。

同様に、主格と対格が同形であっても、次例のような場合、動詞の活用語尾によって曖昧さが解消されるので、語順の示差性には何ら貢献しない。

- (22) Þá 3c-métte hie Æðel-wulf ealdor-mann on Engla-felda, ... (“Then Ealdorman Etherlwulf met them at Englefield”)

この文中で、*hie* も *Æðel-wulf* もどちらも主格・対格の両方の解釈が可能だが、動詞 *3e-métte* が 3 人称単数の活用変化をしているため、*hie* を主語とした呼応の可能性は排除されるわけである。

また、以下の例は、主語と目的語が共に代名詞の *hie* であるため、統語的に曖昧であるが、結局どちらの解釈を取ろうとも認知的な意味に差異はないので、ここでの議論からは外れる例である。無論、情報の新旧の流れや話題・評言といった機能構造の視点からの考察が必要とされるのは言うまでもない。

(23) ..., þá wendon hie hie on hira ágen 3e-þéode ealle, ... (V-S-O vs. V-O-S)

(“then they translated them all into their own language”)

(24) ..., siþþan hie hie 3e-leornodon, hie hie wendon ealla ... (S-O-V vs. V-S-O)

(“when they learned them, they translated them all”)

5. まとめ

以上の議論をまとめると、語順によってしか文法関係を示し得ないと考えられる事例がいくつか見られるものの、そうでない例もあり、OE の語順が常に示差的就であったと断定するまでには至らなかった。ただ、検討した資料中に見出された 20 例あまりの曖昧な構造を有する文は、屈折により文法関係が示される言語とされている OE にあっても、もはや屈折のみによっては文中の文法関係を十分には示しえなかったということをはっきりと示している。

これはまた、英語の語順の発達という通時的観点から見れば、「語尾の水平化→語順の固定化」という順序とは逆の変化をも示唆するものである。つまり、OE においても、ある程度は、語順という構造的な仕組みが主語・目的語といった文法関係を文中の位置により示していたとするなら、屈折語尾が示す文法関係は言わば余分な情報となるわけで、それがために屈折の方が徐々にその役割を失って消えていったとも考えられるからである。いずれにせよ、語尾の水平

化と語順の固定化とは、どちらか一方が原因でもう一方が結果という単純な関係ではなく、両者が相携えて進行していったのであろう。

注

- 1) 旧情報と新情報の配置については、よく引き合いに出される「旧→新」という流れが常に保たれるのかどうか、改めて検証する必要があるかもしれない。例えば Hopper (1979) によれば、OE における新情報・旧情報の順序は grounding と関連しており、前景化された発話、すなわち主要な叙述を担う部分では「旧→新」という通常の情報配列が好まれるものの、主要な叙述に補足的な情報を付け加える背景化された発話では、S-V の語順となる傾向があり、その主語には必ずしも旧情報でないものが現れるという。
- 2) この語順は等位接続詞に導かれる等位構造にも典型的に現れるので、Andrew (1940) は "conjunctive order" の名称を与えている。
- 3) 資料分析に使用したテキストは、Diamond (1970) の pp.70-80 "The Voyages of Ohthere and Wulfstan", pp.82-84 "The Story of King Cynewulf of Wessex", pp.104-108 "King Alfred's Preface to *Pastoral Care*" である。以下に挙げる引用文は、ダイアクリティクやパンクチュエーションも含め全てこの Diamond のテキストに従っている。

参考文献

- Andrew, S.O., 1940, *Syntax and Style in Old English*. Russell & Russell.
Baker, Peter S., 2003, *Introduction to Old English*. Oxford: Blackwell.
Denison, David, 1993, *English Historical Syntax*. Longman.
Diamond, R.E., 1970, *Old English: Grammar and Reader*. Wayne State Univ. Press.
Fries, C.C., 1940, On the Development of the Structural Use of Word-Order in

Modern English. *Language* 16, 199-208.

Hopper, Paul J., 1979, Aspect and Foregrounding in Discourse. T. Givón, ed.

Discourse and Syntax, 213-241. Academic Press.

Mitchell, B., 1985, *Old English Syntax* 2 vols. Oxford: Clarendon.

Mitchell, B. & F.C. Robinson, 1982, *A Guide to Old English*. Oxford: Blackwell.

Quirk, R. & C.L. Wrenn, 1955, *An Old English Grammar*. Methuen.

Traugott, E.C., 1972, *A History of English Syntax*. Holt.